

モダンな文学について書くか教える人は誰でも、一九二二年に多くの時間を費やす。実際、英語のモダンな文学に関するきわめて妥当な説明は、一九二二年二月の『ユリシーズ』(Ulysses) 出版から一九二三年秋の『砂糖きび』(Cane) 『ハルモニウム』(Harmonium)、『春など』(Spring and All) の出版に至るまでのわずかな月日の作品に基づいて行うことができるだろう。何年間かそのような説明をしてきたあと、私は自分がその時期の書店にいて、『荒地』(The Waste Land) とウイラ・キャザーの『我らのひとり』(One of Ours) の両方を含んでいる、あるいは『バビット』(Babbit) の隣に『ジェイコブの部屋』(Jacob's Room) が並んでいる目録を、拾い読みしているのを想像し始めた。そのような行為はその時期には可能であったに違いないが、しかし今では、そんなことを考えるのは少々混乱を招く。というのも、我々のモダンな文学についての見方においては、そのような作品は互いに完全に隔離されているからである。モダンなイギリス文学は一般的に、モダンなアメリカ文学とはかなり切り離されて教えられ、解釈されてきたし、アメリカ文学そのものがさらに細分化されているために、エリオッ

トとトゥーマー、あるいはエリオットとキャザーの間にあり得る結びつきについて思い描くことはほとんどできない。この推定上の書店には当然、新聞と雑誌もあったはずだし、いうまでもなくゼーン・グレイの『荒地の放浪者』(The Wanderer of the Wasteland) のような大衆小説もあっただろう。読者はその大衆小説を、エリオットの作品と一緒に家に持ち帰って、荒野での放浪について違った見方があるのを知ったかもしれない。ほとんどの文学批評はそのような題材を調べることなど到底なかったために、その存在自体がたいは驚きである。

こうした状況に不満を抱き、私は自分を一九二二年の理想的な読者にする決心をした。非常に理想的な不眠症を抱えているので、『ユリシイズ』だけでなく、同じ年に出版された他のどんな著作にも適している読者である。私は先験的な区別や序列なしに、この重要な一年に書かれた題材に取り組みたいと考えた。とはいえ、先入見を持たずにそれらに取り組むのはほとんど不可能だということは、よく分かっていたけれども。言い換えれば、その年の最も傑出した二つの作品、すなわち『ユリシイズ』と『荒地』から出発して、それからそれらを取り巻く状況を再構成するように読んだのではなかった。私は手に入るものはすべて読み、遅かれ早かれその読書が、おそらく私をその二つの作品に連れ戻すだろう、それもきつと新たな予期しない方向から連れ戻すだろう、と想定しながら読んだのだ。

最終的には、その実験はやるだけの価値があったと思う。文学上のモダニズムの傑作がその時代の推論的な枠組みにどのように適合するかを、より包括的に理解したいという私の願望は、その実験の過程で十分に満たされた。しかし私はまた、『ユリシイズ』と『荒地』以上に、それ以外の作品についてより多く語った。それらの作品の中にはほとんど知られていないものもあり、初めに読者にその事実を知らせておいたほうがいいだろう。本書では、生み出すつもりがなかったもの——この二つの偉大な作品の新たな包括的な読解——を提供しようとはしておらず、そのようなものを求めている読者には、あまり見るべきものはないに違いない。私は文学研究の領域外にある、かなりよく知られた作品について論評し、それもときには詳細に論じていて、そのような知的侵犯

の危険はよく分かっている。特別に注意を払いはしたが、それ以外には、そうした行いへの擁護に確信はないけれども。本書に関してその注意が十分であったことを願うばかりである。さらに本書には、一つの大きな省略がある。あるいは、多くの省略の中で私がとりわけ自覚している一つと言ってもいいが、それは一九二二年の主要なアフリカ系アメリカ人の作品、すなわちクロード・マッケイの『ハーレムの影』(Harlem Shadows)とジェイムズ・ウエルドン・ジョンソンの『アメリカ黑人詩集』(Book of American Negro Poetry)について、相当な分量の分析がなされていないということだ。その理由はたんに、前書においてそれらの作品について、本書で考察するとしたら書くはずだったことをすでに書いたからである。おそらくこの題材に興味がある読者は、私の省略を修復するために本書に、その著書『モダニズムの方言』(Dialect of Modernism)の四章と五章をつけ加えるだけでいいだろう。

必然的に、より修復し難い別の多くの省略がなされている。本書の探究のいくつかの面を推し進めることによって、フィッツジェラルドの『美しく呪われた人』(The Beautiful and Damned)やウルフの『ジェイコブの部屋』のような主要な作家のいくつかの作品から離れ、一九二二年に設定されている『偉大なるギャツビー』(The Great Gatsby)や、その年に書き始められた『ダロウェイ夫人』(Mrs. Dalloway)のような、問題にしている年にそれほど明白なたちでは位置づけられていない作品に向かう結果になった。残念ながら、いくつかの作品についてはあまり有益なことは何も言えなかつた。その中の主なものとしては、エリザベス・フォン・アルニムの『魅惑の四月』(Enchanted April)があり、その作品を読んで一九二二年が予想外の、文学に通じた富裕な人たちが満たされていたという印象を時折受けた。さらにはまた、多くの偉大な作品について結局のところ満足のいく論評ができず、この年が前代未聞の言葉の無益さを表す年であると確信した。しかしながら、この企画全体を振り返って今私にとって驚きなのは、読んだ著作のそれほど多くを省かざるをえなかつたことではなく、最終的にこんなに多くを含めることができたことである。非常に乏しい成果しか伴わずに費やされた、あんなにも多くの

時間を思い出すときに私を襲う浪費の感覚は、他のやりかたでは決して発見できなかったはずの、これほど多くの予期せぬものが読めたという満足感によって和らげられている。

目ざとい読者なら、場合によっては、省かれていたかも知れない例を入れるために一九二二年という厳密な制限が拡張されていることもあるのに気づくだろう。とりわけ、論争やニュースの記事、あるいは文学上の経歴を一九二三年まで追わないようにするのは難しいことが判明したが、その他にも、前後の文脈を提供したい、あるいは自分の主張を立証したいという欲求のせいで、本書で定めた年から遠く離れている場合もある。そのような過失については、年というものが、記述するには特異な単位であると言うことしかできない。ひとつの年が提供しているように思える同時性は、ほとんど常に広大であり、一年の中にあまりにも膨大な年代記が存在しているために、それをまったく無視することはできない。一年のうちにほんのわずかな文学作品だけが構想され、書かれ、出版されるという単純な事実によって、一九二二年をその前後の年から離して密封するのは不可能となっている。結局私は、この研究のそもそもの動機、すなわち文学上のモダニズムとそれが一部をなしている公的な世界との関係についての調査における、限定された試験的な事例として一九二二年を取り上げるといふ動機を導きの糸にしなければならなかった。非常に精緻な史料編纂を行おうという野心はまったくなかったけれども、モダニズムの少なくとも一部を、劇的に拡大された文脈において検討することによって、文学上のモダニズムについて何かもう少し知りたいと望んだのだった。省略と偏りが存在するのは避けがたいことであるとはいえ、それほど短い期間についての記述なのに、それでもきわめて多くの省略と偏りがあるとすれば、その原因は、仮に結果として本書で選んだ年のいくつかの特定の側面が顧みられないままになったとしても、モダンな文学の研究に特別な貢献をしたい、という私の欲求のせいであるに違いない。

今回の研究において、引用文献に関して協力をいただいた、ルイス・チュードソーケイとアリソン・チンに感謝したい。エリン・テンブルトンにも、索引を編集するのを手伝ってもらったことに感謝したい。この企画の

正気さではないとしても、実現性が私にとってたびたび疑わしく思えたときに、同様の企画を完成させるのに成功した他の二人の研究者、リチャード・スタインとトム・ハリソンを知っていたことも有難いと思っている。この年に取り組んでいる時期に、いくつかの別の年も同様の扱いを受けていて、その方法の有効性が示されていると分かり、いくぶん嬉しかった。しかしまた、一つの年を制覇した研究者の中で、さらに別の年を制覇するのを選んだ人は誰もいないことにも気づいたのだが、この事実は私にとって啓示的でもあるとともに、少し頭を冷やさせるものにも思える。

M・N

カリフォルニア州ロサンゼルス

一九九八年七月